

北海道の水・農業・歴史文化・観光という地域資源を活かした共創と教育効果



池見 真由 (いけみ まゆ)
札幌国際大学観光学部准教授

北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。青年海外協力隊(セネガル、村落開発普及員)、国際協力銀行専門調査員(南アフリカ)、北海道大学ルサカオフィス副所長(ザンビア)、同大学大学院経済学研究科助教を経て、現職。同大学院経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター研究員。総合地球環境学研究所研究プロジェクト共同研究員。専門は開発経済学、国際協力論、地域研究。

*1 研究プロジェクト『サニテーション価値連鎖の提案ー地域のヒトによりそうサニテーションのデザイン』(プロジェクトリーダー：山内太郎)。

はじめに

豊かな自然と水、農、食、そして固有の歴史文化、観光など、北海道は多種多様で豊富な地域資源を有しています。しかし、こうした従来から育まれてきた地域資源は有限であり、何も手をかけず努力もせず維持することはもはや困難であるのが現状です。日本国内だけでなく世界各国の共通課題として国連の「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals = SDGs)」が唱えられているように、持続可能な社会の実現のためには、人々が暮らす地域の自然・環境資源や伝統・生活文化を守り、積極的な保護と活用に取り組んでいくことが求められています。またその担い手として地域の住民、とりわけ地域の未来を切り開いていく若者世代の活躍が期待されています。多くの若者たちが地元の貴重な資源とその魅力について知り、理解し、実際に触れる機会を様々な教育現場で提供されることも必要とされています。さらに若者だけでなく高齢者、行政関係者、民間事業者、研究者、専門家、地元民、外来客、日本人、外国人など、あらゆる立場の人々がいろいろなかたちで関わり合いながら、共に新たな価値を生み出す「共創」の重要性が指摘されます。私たちは、こうした共創が多面的かつ広範囲に実現される地域社会を目指していくべきであると考えます。

そこで本稿では、ケーススタディとして、富良野、新篠津村、札幌、白老町での4つの事例を紹介し、地域資源を活かした共創の在り方について検証します。また、こうした共創のプロセスを通じた若者世代への教育効果の可能性について考察します。

1 富良野での水道調査の事例

国内外から人気の観光スポットとして毎年多くの人々が集まる富良野。ラベンダー花畑に地産地消の美味しいグルメが有名ですが、これらの農と食を支えている源は「水」とあるといえます。筆者が参画した内閣府戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)で、(地独)北海道立総合研究機構、総合地球環境学研究所*1、北海道大学の共同研究チームが富良野市で実施した調査*2によると、地元の住民組織によって維持管

*2 北海道立総合研究機構・北海道大学(2019)「地域自律管理型水道を活用したこれからの地方水道」戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)インフラ維持管理・更新・マネジメント技術『地域自律型の次世代型・水インフラマネジメントシステムへの転換』(研究代表者：牛島健)研究成果資料。

理運営が行われている水道、いわゆる地域自律管理型水道の多くは、良質な水源に支えられており、低コストで良質な水を供給できていることが分かりました。こうした仕組みが実現している背景には、「水は利用する者が管理する」という自己責任の意識に基づき、手間を惜しまず関与してきた地域住民の自助努力がありました。そこで研究チームは、富良野高校科学部の生徒たちと連携して、「地域ぐるみの小規模水道管理システム実証」に取り組みました。生徒たちは、水道利用組合が管理する飲料水の水質を調べて分析したり、聞き取り調査に基づく水道の管路網図を作成しました*3。また「おいしい水を求めて」というテーマで、水道を管理する地元住民、行政関係者、研究者、技術者などに対して実証報告会を毎年行ってきました。

以上の実践より明らかになったことは、調査のためのツール提供と比較的短時間のトレーニングによって、高校生でも地域にとって十分役に立つデータを生み出すことができたことです。高校生が生み出したデータは、実際の水道維持管理に役立つものとなっただけでなく、市役所や専門家にとっても利用価値のあるものとなりました。また、地元高校生は将来の地域運営の担い手として大いに期待される存在であり、その教育に貢献する事柄に対しては地域住民の協力が得やすいこと、さらに、こうしたプロセスがまた新たな人的ネットワークや地域運営の仕組みをつくる上で非常に有効であることも示されました。生徒たちにインタビューした結果、この取り組みに参加して、「自分たちが普段から何気なく飲んだり利用している水のことを詳しく知れて良かった」、「水に対する意識が高

まった」という声が聞かれました。年配の方々から教わったり協力してもらいながら、今まで気づかなかった地元の貴重な資源に対する発見と理解の深まり、さらにはもっと知りたいという学習意欲の向上効果ももたらしていることが分かりました。

2 新篠津村での農業体験の事例

「青空、緑、地平線。他に何も無い贅沢」というキャッチフレーズで、田園ののどかな風景が広がる新篠津村。「オーガニックの里」と呼ばれる程、道内でも有機農家が多いまちとして知られています。その一つである(株)武神北海道では、農業体験を提供しており、札幌国際大学観光学部で「異文化理解」をテーマとする演習受講生が研修に参加しました。参加学生8名のうち7名が外国人留学生でしたが、初めて訪れる新篠津村の大地でグリーンツーリズム*4を実践的に学びました。具体的には、野菜を摘み取る知識と技術を教わったり、トマト、ナス、ジャガイモ、レタス、トウモロコシを収穫したり、農具の鎌の使い方を習って稲刈りにも挑戦しました。レタスは、苗の植え付けから、時折写真を送付していただき途中経過を遠隔で見守りながら、1カ月半後に再び畑を訪れて自分たちが植えたレタスを収穫、そして食べるまでの一連を体験しました。トウモロコシは、もぎたてをその場で生のまま食べてみましたが、甘くておいしいことに学生たち皆で絶賛しました。農作業が終わった後に空を見上げると、きれいで鮮やかな二重虹がかかっている、広大な田園風景に夕焼け空とコラボした見事な光景に、また皆で感動しました。



富良野高校にて「おいしい水を求めて」と題する実証報告会



新篠津村にて武申北海道農園でのレタス栽培体験

*3 富良野市内の地域自律管理型水道の支援（水質分析や管路網図の作成とデジタル化など）を行ってきた富良野高校科学部は、その取り組みが高く評価され、公益財団法人北海道科学文化協会の科学教育活動実践表彰を受賞した。

*4 農山漁村を訪問して、その土地の自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型・体験型の余暇活動を指す。

新篠津村での農業体験は、札幌市内で生活している学生たちにとって、普段の日常では味わえない、かけがえのない経験となり、あらためて北海道の自然の素晴らしさと、農作物の恵みのありがたさを学ぶことができました。また、農園を管理している方々と一緒に働きながら、有機栽培の知識や作業の大変さ、収穫する際に気をつけることから、新篠津村の四季やそこでの暮らしのことまで、いろいろなことを教わることができました。こうした地元の人から直接話を聞いたり交流することも、学生たちにとっては大変貴重な機会となりました。グリーンツーリズムは、単なる観光でも余暇活動でもなく、農・食そして生と真剣に向き合う学習の場であるといえます。多くの若者が経験することによって、衰退が懸念されている地方農業の保全や地域活性化につながる効果の可能性もより高まるかもしれません。

3 札幌での動物園研修の事例

大通公園、時計台、すすきのなどの札幌市中心部からバスで1時間とアクセスしやすく、国内外から人気の高い定山溪温泉。そのすぐ近くに、体験型ふれあい動物園ノースサファリサッポロがあります。そこで園内の方々のご協力の下、同大学で「観光ボランティア」を学ぶ学生たちが、コロナ禍で営業を続ける観光地の様子を観察し、現場から理解を深めるために研修訪問を行いました。会社の運営状況や来場客の動向について関係者から直接話を伺ったり、学生ボランティアとして園内スタッフのお手伝いをさせていただきました。



ノースサファリサッポロにて動物小屋掃除のお手伝い研修

大学での講義やオンライン授業では成し得ない貴重な経験からの学びを得ることができました。薪割りや落ち葉集め、動物への餌やりや小屋の掃除、また動物の世話をしながら園内の管理運営や来場客への対応を行うなど、多岐にわたる仕事を実際に体験し、その大変さをあらためて実感することができました。スタッフ研修の後は、来場客目線で実習を行い、園内の散策や動物との触れ合い、各アクティビティを体験しました。その魅力や楽しさを伝える写真や動画を撮影し、当施設および北海道観光のPRにつなげるための情報収集にも取り組みました。

新型コロナウイルスの影響が避けられない現在、日本全国において動物園などの行楽施設は来場客の大幅な減少により経営が厳しい状況下にあります。そのような中ノースサファリサッポロは、クラウドファンディング*5を活用して資金を募り、屋外・野外施設が充実しているという強みと、訪れる人を楽しませたり驚かせるような工夫を徹底的に凝らし、斬新な企画やイベントを絶えず実施することで、厳しい現況を果敢に乗り越えていることが分かりました。そのユニークな試みの一つである「ヴァーチャルZOO」は、自宅にいても動物園に行ける、いろいろな動物に出会える・触れ合えるコンテンツを作ろうと、Webサイトの仮想空間の中でノースサファリサッポロを楽しんでもらう企画です。この企画は、インターネットを通じて国内のみならず世界中の人が顧客となることから、動画配信の際には日本語だけでなく各国に合わせた多言語での対応が必要になります。そこで、この企画の制作協力に携わった学生たちは、動画のナレーションやテロップの翻訳作業に取り組みました。日本語の文章を英語、中国語、韓国語、ベトナム語、ポルトガル語に翻訳し、また学生自身が外国語翻訳文を読み上げて音声を録音しました。こうした経験は学生たちにとって語学力を養うだけでなく、外国人留学生や外国人教員とのやり取りを通じてコミュニケーション能力を鍛えることにもつながりました。さらに、「自分が住んでいる札幌に、こんなに面白い動物園があるなんて知らなかった」「また行きたいと思った」と言う学生が沢山いたことも分かりました。一人でも多くの若者が、

*5 新たな事業やプロジェクトを開始するために、インターネットを通じて、活動の趣旨や目的に賛同した不特定多数の人々から資金を集めること。ノースサファリサッポロが採用した「購入型」のクラウドファンディングは、事業の起案者が目標額と期限を設定して支援者を募り、支援者はリターン（お返し）としてオリジナルグッズや入場年間パスポート、ドリンク無料券といった金銭以外の特典を得る仕組みであった。

今まで知らなかった地元の観光施設やその魅力を発掘することは大変意義があるといえます。またこうした経験を、同世代の人たちに口コミやSNS等で発信することで、認知度が国内外に普及拡大し、経済効果につながる可能性が広がることも期待されます。

4 白老町でのウポポイ訪問調査の事例

美しい森と湖と太平洋に囲まれた、歴史と文化が息づくまち白老町。2020年7月には北海道初の国立博物館となるアイヌ民族博物館が創設され、ウポポイ（民族共生象徴空間）がオープンしました。そこで、文化観光領域を専門に研究する同大学大学院観光学研究科の院生が、ウポポイを訪問して現地調査を実施しました。ウポポイは、北海道の先住民族アイヌ文化の復興と発展を目的としたナショナルセンターであり、教育効果の高い観光施設という側面から、院生たちは園内全ての体験型プログラムを通して、その特徴や学びの工夫について幅広く調べました。また、アイヌの歴史文化を観光資源に白老町そして北海道へ、近い将来道外・国外から多くの来訪者の集客と定着を実現するため、ウポポイ周辺の飲食店や土産物店、宿泊施設への経済効果という側面からも、情報収集に取り組みました。

院生たちは、調べた内容を整理して研究レポートを作成しました。今回の現地調査を通じて得られた成果、そしてウポポイを訪問して良かった点として最も多く指摘されたのが、アイヌ民族の文化や価値観そのものの壮大さ、素晴らしさの発見でした。アイヌの人々は、自然界すべてのものに魂が宿ると考え、動物や植物、山や湖はもちろんのこと、生活の道具や家を含む世の中のあらゆるものにカムイ（神のような存在）がいるとして、大切に敬いました。自分たちが普段食べているものや着ているものも、カムイが与えてくださったものと考え、日々感謝の気持ちと祈りを捧げながら、北海道の厳しい大自然と共に生きてきました*6。まさに自然と人間の共創を物語っているといえますが、こうしたアイヌの人々の力強い精神と思いやり深い心を学んだことが、院生たちには強く印象に残ったようでした。その他、アイヌの民族衣装や木彫、刺繍に施された独特の文様には、一つ一つ意味があって大変興味

深く、デザインも魅力的であるという意見から、アイヌの伝統技術を現代風にアレンジした観光商品の開発についても提案されました。こうした若者目線からのアイデアは、文化観光の促進における新たな誘客手段となり、また地域振興のための具体策としても大いに役立つものとなり得るでしょう。

おわりに

以上本稿では、富良野での高校生による水道調査、大学生による新篠津村での農業体験、および札幌ノースサファリサッポロでの動物園研修、そして白老町での大学院生によるウポポイ訪問調査の4つの事例から、北海道の水、農業、歴史文化、観光という様々な地域資源を活かした共創と教育効果について検証しました。以上のケーススタディから得られる考察としては、まず、地域の未来を担う若者に対して「学んだ」「理解した」で終わらせることなく、必ず何らかのかたちで具体的に地域社会に還元し、北海道の貴重な資源の保護と発展に寄与する活動の場や機会をつくる、つくりさせることが大事でしょう。また、こうした持続可能な教育効果の具現化を目指しながら、北海道にとっての財産であり「価値」である資源を維持、活用し、また新たに見つけ出す努力を、様々な立場の人が協力し合って推し進めていくことが重要だと考えます。こうした作業を通して人と人がつながり、価値創造の連鎖が生まれるような共創の実現に、産学官連携など民間事業者や研究者、行政関係者そして地域住民が協働して取り組むことが求められるでしょう。



ウポポイにてアイヌの歴史と伝統技術に関する文化観光調査

*6 例えば狩猟、漁労、植物採集をする際には、必要な時に必要な分だけ取り、次の年のためや他の動物たちのためと考えると自然の中に残しておいたり、取ったものは無駄にせず全部食べたり工夫して使っていた。